

## 吉田君の思いで 1

飯高 茂

大学（昭和36年）に入ってまもなく同級生に吉田君がいた。当時の東京大学には語学振り分けの便宜のためにクラスに分けられていて私たちは理科1類15Bというクラスに属していた。彼ははにかみやだったが、話してみると物理や数学に詳しく、複素解析関数や波動方程式を知っていた。このような高校の教育課程を越える話をごく当たり前のように同級生とできたので、とても楽しかった。大学に入ったおかげで、新しい世界が開け、地平線がどこまでも遠く広がっているように思えた。とりとめなく吉田君と話をしていると、度の強いめがねをかけ、学生服をきちんと来た人が、傍らに立って身じろぎもしないで、私たちの雑談を立ち聞きしている。話が中断すると、彼はやおらめがねをしっかりと直し、じつとにらむような目つきをして、

「みなさまの話の聞いていると、全く理解できないことばかりです。どのような本を読んだら、分かるようになるのでしょうか。ぜひ教えてください」

と、きわめて丁寧な言葉で問いかけてきた。彼こそ後に数学の天才として世界の数論の世界に革新をもたらした新谷卓郎君である。

そして、吉田君と新谷君（吉村太彦君も後に加わったが）と3人で神田の神保町の古書店に行き、四方堂、明倫館などで数学や物理の洋書、とくに黄表紙と呼ばれたシュプリンガー社の本、場合によっては上海版と言われた洋書のコピー本を買い求めた。

吉田君と知り合っ間もないときのことだが大学から帰るとき裏門の1つである矢内原門（と言われたごく小さい門）を利用していた。門の傍らにこれも小さくて情けないほど汚い小便所があった。その汚さに尿意を催され、私は吉田君に「じゃ、失礼するから」と言ってトイレに入った。そしてすっきりして外へ出るとまだそこに吉田君が待っていたのである。しかも、待っていたと思わせることを恥じているような素振りである。これには真実、びっくりした。友人として彼への信義を貫かないといけないと思ったのだった。

もう1人の友人である新谷君もきわめて信義を重んじる人であった。これほど真面目な人は他にいないと思わせるような人たちが私の東大での同級生であったのである。

## 吉田君の思いで 2

私は、千葉市内の公立中学である緑中に通っていた。そこで、Nさんという大変活発な女子学生がいた。マドンナというより、ガラッパチであったが成績はよく、3年の終わり頃になると、越境して東京の入学試験を受け、都立日比谷高校に受かったそうだ。昔の日比谷高校は半分近くが東大に入るという空前絶後の進学校であった。

私は大学の1年生になってから真面目に1限から出るべく早起きして、7時前には西千葉駅についた。そして国電に乗って秋葉原、渋谷を経由して東大教養学部前駅まで1時間40分かけて通っていた。ある朝、プラットホームで電車を待っていると「イイちゃんじゃない」と言って、中学生の頃ガラッパチの女子学生だったNさんが声をかけてくれた。日比谷でもまれたせいであろう、すっかり垢抜けしていて、私は田舎の高校を出た大学生にすぎないことを自覚させられた。彼女は東大の理科2類に入っていたのだ。これにはびっくりした。昔の知り合いなので、彼女は饒舌に語りかけてきた。

「理1の〇〇君は、どこどこ教授のおぼっちゃまなのよ、そう言えば、君のいる理1の組には、吉田茂のお孫さんがいるじゃない」

こうしてごく自然に、吉田健介君が吉田茂のお孫さんということが分かった。これにはびっくりしたが、なるほどそうだろう、と納得させられることも多かった。大学生になっている私たちにとって、親がどうの、祖父がどうの、など関係のないことではあったが、新谷君があるとき、

「そういえば、吉田君の計算用紙は原稿用紙の裏紙を使っていますよ」

と言ったことがあり、状況証拠があがったのだ。

新谷君の父上も東大の工学部卒の技術者で、たしか四日市の工場長を務めていたと思う。あるとき、新谷君は父の書棚に『解析概論』があった、と言って古い『解析概論』をもって来た。そのときは、少しうらやましかった。

当時は、吉田茂は超有名人で、吉田健一も有名な存在だった。健介さんはそれが重荷に思ったこともあったのだろうと思う。しかし、私たちの間で話題になったのは、原稿用紙の裏紙の件だけだった。

### 吉田君の思いで3

私は2006年12月に「いいたかないけど数学者なのだ」という本をNHKから出した。その目的は、夭折の天才：新谷卓郎君を世に紹介することだった。本では、S君という名前で新谷卓郎君を出し、Y君という名で吉田健介さんを紹介している。その当時の交流の様子が出ているので一部抜粋する。

S君の読書ノート感想（「いいたかないけど数学者なのだ」から）

S君は大学の数学の勉強を始めたのは比較的遅かったが、始めてみればその勉強ぶりはきわめて堅実であり、すごかった。

『三国志』のような本でも、彼は詳しく読むので読書のスピードが遅い。私の2倍くらいの時間がかかるのだが、内容を実に詳しく覚えていて、詳細に内容を話してくれる。御母堂によると中学生くらいまでは目立たない子で、どうかと思っていたら、高校生の頃から急に成績がよくなって驚いたそうである。高校3年生で、英文の本を読んで感想を書いているのだからそれだけでもまねができない。数学の学習でも、彼は分かるまで徹底的に考えるから、他の人を怖じ気づかせるようなところがあった。

友人Y君はあるとき

「S君がいるのでは、自分が数学をやるわけにはいかない」と言った。これをきいて、私はS君の偉大な数学の才能をあらためて認識した。S君にある才能の輝きはすぐにはわからないものだ。永くつきあっているうちに彼のもつすごい力がだんだん分かってくる。感受性の鋭いY君は繊細な神経の持ち主にであるため、耐えられなかったのであろう。私はS君とY君をともに良く知っているだけとても悲しいことに感じた。

私はもちろんのこと、だれもがS君は数学科に進学すると思っていたが、彼は「物理科に行きたい」と言うのである。私は彼をひたすら説得することに努めた。

## 吉田君の思いで4

< S君の日記から 吉田健介さんが登場しますので >

1月16日

Alexandroff Hopf の『Topologie』の最初の部分を少し読んでみた  
どうも定義がのみこめない。誤植ないし頁の脱落があるような感じ。  
調子の悪いときはフラフラしないで着実にやるべきか。  
確かに思考訓練的意義は零だ！

1月18日

(フーリエ級数の式)

断固、テレビ、週刊誌、新聞に割く時間を削減し投げやりに時間をすごすことを廃棄せよ！

学校の帰り戸田に会い、1時間半ほど立ち話をする

本を読むときはその本質的なものを注視しなければならない

証明のやり方を記憶しようと努めるなど愚の骨頂

しかし未だこの泥沼から足をひけない！

1月23日

スミルノフV分冊を読むつもりであったのに1行だに不読。テレビのせいだ！

昨日の神田歩きは『Methoden』を目的にしていたのに

それを買わずに『Analytical Dynamics』という古い本を買ってしまった。

『確率論の基礎』や『Hilbert 空間』を眺めると Lebesgue 積分を理解していなければんで話にならないことを痛感した。

1月24日

(ベクトルの計算、電磁気学のベクトル計算 多数)

吉田君は高校時代、この場合粒子はサイクロイド軌道を取りうることを証明したとのこと  
と吉田君の提出したこの問題を休講であった物理の時間を全部投入したが、固有値を0、 $h p$ 、 $-h p$ と誤置し、固有ベクトルの計算に不可解な矛盾を生じたり、「功名心」と「みえ」で心焦ったり。